福島県立図書館報

あづま

第56巻（通巻260号）

「貸し本屋と図書館」

境野　米子

小学校の２，３年のころ、隣に貸し本屋ができました。土間から天井近くまで、ぎっしりと並べられたピカピカの本がなんともいえない輝きを放っていました。母にせがみ、「一人一冊」と決められ、借りに行きました。何しろ５人兄弟なのですから、一度に５冊の本が読めるわけです。本を選ぶのは私と兄。妹や弟の分も手分けして、きっちり５冊を選びました。借りてきたのは全部漫画。借りる期間は３日間。それを過ぎると超過料金がかかりますから、早く読んで、次の人に回さなければなりません。ちょっと怠ければ、兄に本を返されてしまうので、本気で読みました。肉屋の主人が挽き肉機で指を挽いてしまうオドロオドロシイ話しや、美少女が継母にいじめられる話し、怪談、探偵もの、お姫様ものなど、あんなに必死で読んだことがないくらい、せっせと読みました。読み終えた満足感や、また次の新しい本を借りに行く楽しさも格別でした。

驚いたのは父と母だったのでしょう。「一人一冊」と言った母は、週に何度も借りに行くお金を出すわけですし、借りてくる本が全部漫画なのですから、さぞ責任を感じたことでしょう。父は、最初は５人の子どもが熱心に勉強をしていると思っていたようです。ところが、幼い妹と弟が漫画に飽きて（それはそうですよね、借りてくるのは私が好きな「継母、お姫様もの」や兄が好きな「活劇、探偵もの」ばかりなのですから）騒ぎ出したことからアシがつきました。

以後、貸し本屋には出入り禁止。というか、お金をもらえないのですから借りることができません。退屈な、穴の開いたような気持ちでいたとき、母から１冊の本、文庫版の「小公女」を渡されました。最初は字がビッシリ詰まった本なので、抵抗があったのですが、読み始めたら面白くてやめられません。夜中も読み続け、読み終えたときは涙ポロポロ、ボロボロ、感動しました。本の醍醐味を生まれてはじめて味わいました。

そして学校の図書館に出会いました。タダで、何日も借りられる、信じられない空間が図書館でした。先生とのおしゃべりも楽しくて、アラビアンナイト、怪盗ルパン、名探偵ホームズなどのシリーズ本を借りて読みました。家に持ち帰ると、母も読み、妹も読みと、家族みんなで読みました。中学１年のときに、吉川英治の「宮本武蔵」の全巻を家族みんなでまわし読みしたときの興奮は、忘れられません。そんなわけで、もちろん今も図書館を利用しています。最近は司馬遼太郎とアガサ・クリスティーにズボッとはまり込み、抜け出せずにいます。家族での回し読みも相変わらずですが、近頃は子どものほうから「これ面白いよ」と勧められることが多くなってきたのが、ちょっとシャクにさわります。

境野　米子　（さかいの　こめこ）

１９４８年、群馬県前橋市に生まれる。千葉大学薬学部卒。生活評論家・薬剤師。

東京都立衛生研究所にて、食品添加物、農薬、重金属などについて研究。健康、食べもの、化粧品など暮らしの安全について研究を続けている。

‘健康’‘食の安全’‘環境’‘野菜料理’‘化粧品の選び方’などについて月刊誌に連載、また講演で全国を歩く。現在飯野町に在住。

『米子の畑を食べる』、『おかゆ一杯の底力』、『アトピーっ子の満足レシピ』など多数の著作がある。